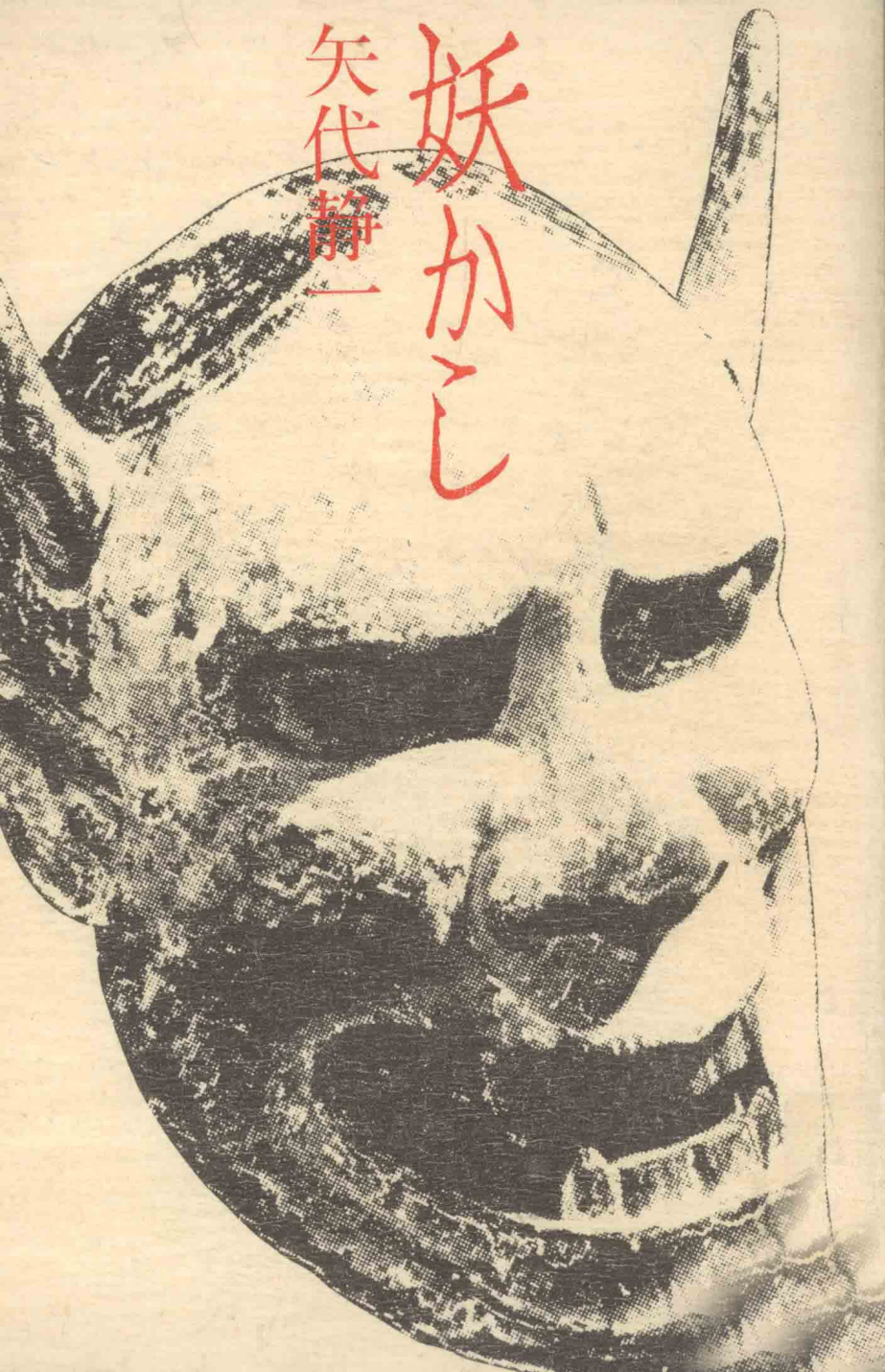
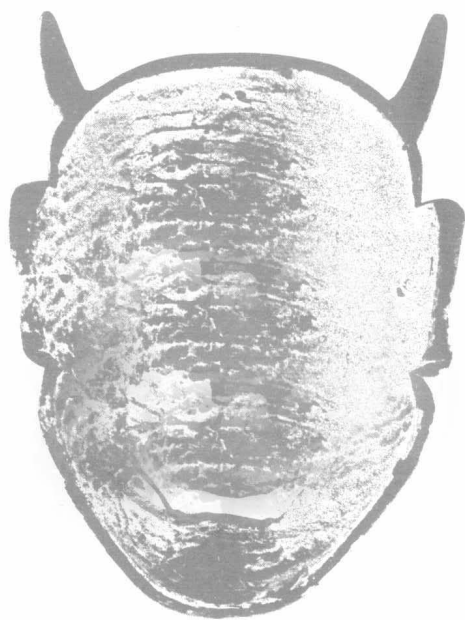


妖かじ
矢代静一



妖かし
矢代静一



妖かし

定価はカバー・帯を御覧下さい

著者 矢代静一

発行者 佐藤昭三

発行所 河出書房新社

東京都新宿区住吉町九五

電話

(営業)三五五・五三一

(編集)三五五・五三二

振替 東京〇一〇八〇二

享有堂印刷・小泉製本

昭和五十三年二月七日 初版印刷

昭和五十三年二月十二日 初版発行

乱丁・落丁本はお取替えます

© Seichi Yashiro 1978

目次

妖かし

5

漂流の果て

87

妖かし

妖
か
し

一
幕

人物

浜木綿 はまゆい

若い女

黄金丸

若い男

浜木綿の夫

石榴 ざくろ

盗賊の頭

太郎介

手下

荒彦

手下

赤猿

手下

源心聖人 げんしん

中年

少女

幻想の浜木綿

老婆 A

B

いまは昔、たとえば平安末期。

プロローグ

陰鬱なる、おどろ沼のほとり。黄金丸が仰向けに倒れている。眠っている。夜明け前、雪がしんと降っており、既になりに積っている。

薄気味わるい風体の老婆二人が、そっと出てきて、あたりをうかがう。黄金丸に近づいて、寝息をうかがい、やがて、手馴れた要領で、黄金丸の太刀を手始めに、身ぐるみさらって行く。黄金丸は、脱がされている間、ときおりうめき声をあげるが、寒さと眠気のため、さからうことができない。一度だけ、力のない声で「追剥だな」とつぶやくだけ。

遂に半裸にされる。二人の老婆は、奪ったものを布袋にしまいこみ、さっさと逃げ去る。

老婆たち（捨台詞よろしく）おこぼれ頂戴、おこぼれ頂戴。

黄金丸（うわごとのように）……寒い……凍え死にしようだ……眠い、闇の中に吸いこまれて行くようだ。誰か来てくれ、叩き起してくれ、俺の目を開けてくれ、闇がこわいのだ。しいッ、誰かやってくる。目を閉じていてもそれは分る。来た。来てくれた。なぜ黙っている。なぜ、突っ立ったままで、俺を助けてくれない。それにしても、お前の顔色のわるさはどうだ、まっ蒼に透き通っている。分った、死神だな。うなずいた。なんだと！　なんて言った！　ふるえ声でなしに、はっきりとものを言え。……なに、俺はいま、幽界と明界の境をさまよっているというのか。幽界とは冥土のことだな。いやだ、俺はまだ娑婆に未練がある。なぜ俺はこんな目に会わなければいけないのだ、くそ！　雪の冷たい重さが、俺を殺そうとしている。またなにか言ったな、繰返せ、……なに、俺のした悪事のかずかずを思い出せというのか、俺はなにもしていない、なにも。逆だ、俺はよいことをした、一人の女を倅にしてみた、たとえ束の間にせよ。なに、思い出せというのか。あの事件が起ったひと月ほど前のことを。雪こそ積ってはいなかったが、いまと同じような夜明け前のひとときだった。

洞窟。(盗賊たちの隠れ家)

一より一ヶ月ほど前の夜明け前から、夜明けにかけて。

ざくろは、一人、いらいらと歩きまわっている。

片腕を怪我していて、布で首から吊っている。

ざくろ ええい、もう夜が明けてしまうというのに！

耳をすます、馬の蹄の音が聞えてくる。みるみる近づいてくる。停る。
夜明けの光が、以下、次第次第に洞窟の内部を明るくする。

ざくろ 首尾はどうだった！

太郎介、荒彦が、盗んだ財宝をかついで入ってくる。さいごに黄金丸が入ってきてざくろの前に仁王立ち。

黄金丸 見れば分るだろう。

ざくろ (盗品に目をやりながら) 上出来のようだな、たしかに、黄金丸。

黄金丸 約束通り、夜明けまでにすませた。

ざくろ いまをときめく藤原安永の、あのものものしい警備の目を盗んで、よくやった。

黄金丸 あんたの、指図通りにやったまですよ。

ざくろ へりくだるな、もっと威張れ。指図通り実行できる奴は、よほど、度胸と智慧が備わっていないてはできない。正直言って、お前たちが戻ってくるまで、不安だった。

俺が怪我さえしなければ、陣頭に立ったのにと、齒がゆい想いだった。しかし、黄金丸、お前は、これで、もう立派に俺の片腕になった。

黄金丸 片腕では不満だな。

ざくろ なに！ (氣づいて) あ、そうか (意味ありげに笑って) 分った、分った。で、藤

原安永はどうした！

黄金丸　むろん、殺した。刃向う奴も逃げまどう奴も、目に入ったかぎり、殺した、なア、太郎介、荒彦。

太郎介と荒彦は得意気にうなづく。

ざくろ　ざくろの幟は、屋敷に残したろうな。

黄金丸　むろん。これで、あんたは、京の都一番の盗賊になったわけだ。

ざくろ　これも、みな、お前のおかげだ。三月近くも、安永の屋敷に住みこんで、綿密な見取図をこしらえてくれたお前の。

黄金丸　なに、俺はなにもしなかった。

ざくろ　自信を持つと、人間、どうも謙虚になるらしいな。

黄金丸　ほんとのことよ。

赤猿の声　ぐずぐずするな！

両手をしばられた浜木綿と源心聖人がよろけるようにして、入ってくる。後から赤猿。

ざくろ なぜ、余計な荷物を運んできた、みすみす、この隠れ家を役人に教えるようなものではないか、すぐ殺せ。それとも、この二人になにか深い仔細でもあるのか。

黄金丸 (はまゆうをあごでしゃくって) はしためだが、女房にしてやった。

ざくろ この女がそうだったのか。

黄金丸 御挨拶しろ、お頭のざくろ様だ。

はまゆう はまゆう。

ざくろ やさしいな。

黄金丸 俺を盗人と知らず、ただの下郎だと信じ、屋敷や蔵の模様を、手に取るように教えてくれた女だ。言ってみれば、こいつのおかげで上首尾に終わったのだ、すこしぐらいのなさをかけてやってもよいだろう。

ざくろ しかし、黄金丸、お前もなかなかやるな、半月ほどで、もう、この女を手に入れたそうではないか。

黄金丸 あんたに比べれば、まだまだ、あんたは、たったの一日で……ものにした。

ざくろ (意味ありげに笑う) ……………

黄金丸 それから、この坊主だが……